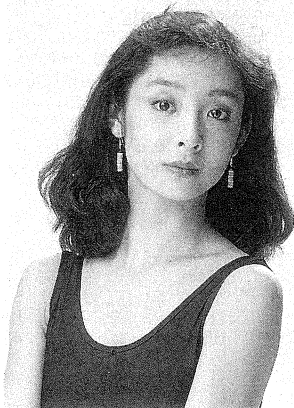


エッセイ

随想



くさかり・たみよ／東京都出身。1985年、橋本工学校卒業と同時に叔父佐美バレエ団入団。「白鳥の湖」「ドン・キホーテ」「ロメオとジュリエット」等、古典全幕バレエの主演から創作まで幅広いレパートリーを持ち、国内外の舞台で活躍中。美しい容姿に恵まれた華あるバレリーナとして人気が高い。

一七歳の時、初めて英国ロイヤル・バレエの「マノン」を観た。アベ・プレヴォーの小説『マノン・レスコー』を題材にした、ケネス・マクミラン振付の名作である。マノンに現在ロイヤル・バレエスクールの校長である、デイル・メイ・パーク。そして、デ・グリユーには、現在ロイヤル・バレエのディレクターである、アントニー・ダウエルという配役であった。私は、あいにく良い席のチケットが取れず、上野にある、東京文化会館の二階の上手側の端から三番目の席に就いたとき「これじゃあ半分から向こう側しか見えない」と、がっかりしながら、緞帳が上がるのを待った。一幕が終わり緞帳が下りて客席が明るくなった時、それまで観ていたものがあまりにも素晴らしかったこと、この後、物語がどのように展開するのだろうかという期待で胸が膨らみ、高揚していた。二幕も三幕も二階の隅からのぞき込むようにして、舞台上に魅入っていた。

まるで映画のようなバレエだと思った。二人が出会い恋におちてゆく姿。マノンが金持ちの老紳士がちらつかせる大きな宝石や豪華な毛皮に気を取られ、浅はかにもデ・グリユーのことを裏切ってしまった場面。そして最終幕、アメリカに追放となったマノンを追って来たデ・グリユーと、瀕死のマノンのパ・ド・ドゥ……どの場面を取っても素敵な映画の一場面のように感じた。まるで芝居の台詞が聞こえてくるようだった。バレエでこんなにもドラマチックなものが創れるなんて、それまで想像もしなかったので、私は、驚きと感動で、なんとも言いがたい幸せな気分になった。そして、帰る道すがら、一緒に観に行った父とどんなにすごいものだったか興奮して話しながら帰った。

子供の頃の記憶をたどってゆくと、私が初めて感動し、驚き、「すごい」と思ったものは、小学校一年の時にテレビで観た、札幌オリンピックのジャネット・リンのスケートニングだ。それを観て踊ることに憧れた。そして次は小学校二年の時にテレビで観たマイヤ・プリセツカヤの「瀕死の白鳥」。その日はピアノの発表会の日で、たまたま出かける前につけていたテレビに映っていたのだ。本物の白鳥のような、あの腕の動きは、何か異様な物を見してしまったような強烈な驚きだった。バレエの稽古を始めてからしばらく経った小学校三年の時に、「NHKバレエの夕べ」という番組で森下洋子さんの踊る「ドン・キホーテ」を観た時、ほんとうにびびくりした。初めてグラン・フェツテを自らにしたからである。ちなみにグラン・フェツテという

感動の記憶

草刈民代

のは、古典バレエの見せ場に出てくる三二回回転する技の名前である。バレエの稽古を始めたといっても、まだ回転のステップの基本しか習っていないなかつた私は、独学のように回転する軸が微動だにせず、若々しい澄みとした力強さで、いつまでも回り続ける森下洋子さんが映っているテレビの画面を、吸い込まれるように口を開けたまま魅入っていた。バレエでこんなにも凄いことをするなんて知らなかったからである。そして一緒に観ていた母に向かい、大事件でも起こったかのように「まだまわってる！」と、興奮のあまり叫んだ。

子供の頃、素晴らしいものに触れた感動は今でも克明に私の中で記憶されている。何かを見て心を動かされたという経験は、確かに私にとっては大事件であった。よく考えてみれば、それが「感動した」ということなのだと思う。

芸術って何なんだろうと考えることがある。そういう時いつも私の頭の中に浮かぶのは、ゴッホという名前と彼の描いた絵だ。小学生の時、図画工作の時間に習った、心を病みながらもひたすらキャンパスに向かい表現し続けた天才と狂気の画家と言われる人である。自分の耳を切り落とし、その自画像まで描いて創作活動を続けたという話を先生が私たちにした時「えーっ」「うそー」「すごいー！」と皆が口々に言っていて、一瞬教室が大騒ぎになっていたのを思い出す。

五年程前、オランダのアムステルダムに行った時、ヴァン・ゴッホ美術館に行った。その時の、苦勞がこちらにまで伝わってくるような初期の頃の作品。いまにも動き出しそうな農夫を描いた数々の絵。そして有名な「ひまわり」という絵の、あの狂気を連想させるような強烈な黄色が目に入ってきたときは衝撃的だった。黄色いひまわりが飛び出して来たように見えたのである。私は次の日もひまわりが飛び出して来るかどうか、わざわざ美術館まで確認に行ったのだ。

芸術という言葉が聞くと困難という言葉が連想する。だからヴァン・ゴッホのような特殊な天才をイメージしてしまうのかもしれない。なぜなのだろう。よく考えてみれば私だってバレエという芸術に触れながら育ってきたはずなのに、その言葉に崇高なイメージを持ち過ぎて、自分の具体的な言葉を持ちあわせていないような気がする。確かに芸術品というのはその人の肉体から絞り出して創り出されたような、崇高さを感じさせるものである。素晴らしいダンサーの踊り、俳優の芝居、画家の絵、演奏者が奏でる音楽……考えてみれば色々なものが浮かんでくる。そういうものに心が動かされた時のことはいつまで経っても忘れずに、それにまつわる状況まで良い思い出となって残ってゆく。そう考えてみると、芸術や文化というのは、人が豊かにならなければならぬものだと言われることがよくわかる。感動することを大切に、良い思い出をたくさん創ってゆきたいと思う。そして私なりに芸術や文化に触れてゆくつもりだ。